

幼稚園教諭自身によるペアレント・トレーニングの 実践(2) : どのような子どもに効果が見られたのか

著者	福島 裕子, 立元 真, 古川 望子, 椎葉 恵美子, 齊田 聖美
雑誌名	宮崎大学教育文化学部紀要. 教育科学
巻	28
ページ	73-81
発行年	2013-03-29
URL	http://hdl.handle.net/10458/4520

幼稚園教諭自身によるペアレント・トレーニングの実践(2)

—どのような子どもにも効果が見られたのか—

福島裕子¹, 立元 真², 古川望子³, 椎葉恵美子⁴, 齊田聖美¹

Parent Training by Kindergarten Teachers (2)

—The difference in intervention effect in terms of behavioral tendency in children—

Hiroko FUKUSHIMA, Shin TATSUMOTO, Misako FURUKAWA,
Emiko SHIIBA, and Kiyomi SAITA

福島・立元・古川・齊田・椎葉 (2013) では、幼児版ペアレント・トレーニングプログラム (はな・ちゅう・ほ) を、研修を受けた附属幼稚園教諭が実施し、それが高い精度で行われ、立元(2009)が行った研究と同等なポジティブな効果が得られるという実行可能性を検討したところ、ポジティブな効果が得られることが示された。

立元(2009)が行ったペアレント・トレーニングでは、参加者を『適切な養育スキル群』・『不適切な養育スキル群』・『コミュニケーション不全群』の3群に分けたところ、養育スキルの平均値の差の検定において、『コミュニケーション不全群』における「関心」を除いた全ての因子で、介入の効果および介入効果の維持が示されていた。効果サイズによる効果判定の基準を併せてみると、『適切な養育スキル群』における「話し合い」のスキルを除いてすべての群のすべての養育スキルの下位因子において介入効果が認められた。

しかし、同じ基準で判定した福島ら (2013) における介入の効果は、『不適切な養育スキルを用いる群』の「罰スキル」、『コミュニケーション不全群』の「関心スキル」においてのみ効果が認められた。立元(2009)と福島ら (2013) の介入効果の結果では大きな違いが見られたが、保護者に改善して欲しいスキルには介入による改善が見られていた。

立元・福島(2009)では、介入を行った実験群を介入開始前の親評定の子どもの行動傾向 (CSB-RS; 立元・古川・福島・永友, 2011) によって、『引っ込み思案の子ども群』、『問題行動傾向のある子ども群』、『社会性の高い子ども群』の3群に分類した。『引っ込み思案の子ども群』は、5領域の行動傾向のうち、「衝動的・多動的行動」「攻撃的行動」「協調的行動」「自己統制行動」の4領域で有意な改善を示し、効果サイズの検討では、全ての領域にわたって大～小の介入効果が認められた。実験群の「衝動的・多動的行動」におけるWL期における変動等、慎重に考えなければならない部分もあるが、概して『引っ込み思案の子ども群』に対しては、良好な介入効果が示されたと考えることができる。『問題行動傾向の子ども群』は、得点の平均値の

¹ 宮崎大学教育文化学部附属幼稚園・宮崎大学大学院教育学研究科

² 宮崎大学教育文化学部

³ 宮崎大学医学部

⁴ 宮崎市立住吉南小学校・宮崎大学大学院教育学研究科

推移から見た効果の検討では、「孤立行動」のみにおいて有意な改善が示された。また、効果サイズの検討においては、全ての領域に渡って中～小の改善が示された。『社会性の高い子ども群』においては、得点の平均値の推移においても、効果サイズによる検討においても、改善効果は示されなかった。あらかじめ、行動傾向が良好な子どもたちであるため、天井効果が生じてしまったと解釈している。福島ら（2013）と同じように3つの基準に照らし合わせて効果の検討を行うと、立元・福島（2009）は『引っ込み思案の子ども群』の「衝動的・多動的行動」「攻撃的行動」「協調的行動」「自己統制行動」に効果が認められた。また、『問題行動傾向の子ども群』の「孤立行動」に効果が認められた。

本研究は、幼児版ペアレント・トレーニングプログラム（はな・ちゅう・ぼ）を、研修を受けた附属幼稚園教諭が行った福島ら（2013）の介入のデータをもとに、子どもの行動傾向の分類による検討を行う。立元・福島（2009）が行ったものと比較し、類似した介入効果が得られるか否かを検討することを目的として行った。

【方法】

調査対象及び手続き

調査対象及び手続きは、福島ら（2013）と同じであった。

平成18年から23年まで、宮崎大学教育文化学部附属幼稚園の年中児の保護者の中から参加者を募って、集団形式のペアレント・トレーニングを行った。介入は、夏休みが終わり子どもたちが落ち着いた頃から約1ヶ月間行った。

幼児版のペアレント・トレーニングプログラム（はな・ちゅう・ぼ）を用いた。

幼児版ペアレント・トレーニングプログラム（はな・ちゅう・ぼ）

プログラムの構成は、福島ら（2013）と同様であった。

第1回：注目を与えること ①「注目を与えること、取り去ることの効果」、②「注目の与え方とそのポイント」、③「子どもの行動を3つ（はなまる行動、注目獲得行動、ぼーそー行動）に分類すること」を説明した。さらに、ホームワークとして、「行動分類表」のプリントを配付し、保育活動を通して子どもの行動例を分類・記入するよう求めた。

第2回：ほめること（賞賛） 普段どのように子どもをほめているかについて発言を求め、ディスカッションを行った。続いて、①「賞賛の方法とポイント」、②「学習の原理（レスポナント条件づけ、オペラント条件づけ、観察学習）」、③「予告、プレマックの原理」、④「シェイピングの原理とプロンプティング」、⑤「トークンシステム」の教示内容の説明を行った。さらに、⑥「スモールステップの原理と背向型の原理」についての説明を行い、プリント課題を配付した。

第3回：シランプリ（計画的無視）をすること 注目獲得行動の具体例（子どもが注目獲得行動としてスーパーで泣き騒ぐ）を提示し、ディスカッションを行った。おもな教示内容は①「計画的無視」、②「非隔離型のタイムアウト」であり、ロールプレイを交えてポイントを学習した。

第4回：上手な制限を設けること（制限） おもな教示内容は、①「望ましい行動が生じやすいようにすることによって“ぼーそー行動”を防止すること」、②「養育の方向性を明確にすること（家族のルール）」、③「制限のテクニック（指示、警告、タイムアウト）」であり、ロール

プレイを交えてスキル学習を行った。

第5回：子どもの発達と心の問題 このセッションでは、現在の子どもの発達上の実状や心の問題をディスカッションした。また、保育上の問題に対処するための問題解決の思考およびその実践例について説明した。

ペアレント・トレーニングのトレーナーとしての研修

平成17年度にプログラムの開発者が附属幼稚園の保護者に対して幼児版のペアレント・トレーニングを実施した(立元, 2005)。著者は、トレーニングの様子を観察すると同時にビデオ撮影を行い、ビデオ記録をテキストに起こす作業を行って、内容を詳細に学習した。次いで、附属幼稚園の職員研修としてトレーナー演習を行った(福島ら, 2013)。

査定のための尺度

プログラムを実践したことの、参加者や子どもたちへの効果査定については、母親の養育行動の変容を調べるために、幼児版養育スキル尺度Ver.2(立元, 2005)を用いて母親の養育スキルの変容を、子どもの社会的行動評価尺度(CSB-RS; 立元ら, 2011)を用いて子どもの社会的行動の変動を、心理的ストレス反応尺度(新名・坂田・矢富・本間, 1990)を用いて母親のストレス反応の変化を、それぞれ母親評定によって測定した。これらは、介入開始1ヶ月前・プログラム開始直前・プログラム終了直後・プログラム終了1か月後に査定を行った。

養育スキル尺度 母親の具体的な養育行動を調べるために、立元(2005)の、幼児期の子どもを持つ母親用の養育スキル尺度Ver.2を用いた。この養育スキル尺度は、ポジティブな養育スキルとしての「好ましい働きかけ」スキル(15項目)、「話し合い」スキル(7項目)、「関心」スキル(4項目)、さらにネガティブな養育スキルとしての「罰」スキル(12項目)と「一貫性のないしつけ」スキル(6項目)からなる。

子どもの社会的行動尺度(CSB-RS) 子どもの行動傾向を測定するために子どもの社会的行動尺度(CSB-RS)を用いた。この尺度は、31項目を7段階で評定し、ポジティブな行動傾向としての「協調的な適応行動」の因子(7項目)、「自己統制的行動」の因子(2項目)、および、ネガティブな行動傾向としての「衝動的・多動的行動」の因子(9項目)、「攻撃的行動」の因子(6項目)、「孤立行動」の因子(5項目)の5つの観点から測定する(立元ら, 2011)。

心理的ストレス反応尺度 母親の心理的ストレス反応を調べるために、新名ら(1990)によって作成された53項目からなる心理的ストレス反応尺度を用いた。この尺度は、情動的ストレス反応を測定する4下位尺度計26項目「抑うつ」(8項目)、「不安」(8項目)、「不機嫌」(5項目)、「怒り」(5項目)、および認知・行動的ストレス反応を測定する9下位尺度計27項目「自信喪失」, 「不信」, 「絶望」, 「心配」, 「思考力低下」, 「非現実的願望」, 「無気力」, 「引きこもり」, 「焦燥」(それぞれ3項目)によって構成されている。

【結果】

子どもの行動傾向の分類

ベースライン期である介入開始1ヶ月前(pre30)と介入開始直前(pre0)における、CSB-RSの「衝動的・多動的行動」「攻撃的行動」「協調的行動」「自己統制行動」「孤立行動」の5領域のZ得点をクラスター分析にかけ、3つの群に分けた。「協調的な適応行動」, 「自己統制行動」の得点が低い群を、『引込み思案な子ども群』, 「協調的な適応行動」, 「自己統制行動」の得点が高い群を『社会性の高い子ども群』, 「衝動的・多動的行動」, 「攻撃的行動」, 「孤立行動」の得

点が高い群を『問題行動傾向がある子ども群』とした (Fig.1.参照)。それらの群をさらに、実験群と統制群に分け計6群とした。その結果、『引っ込み思案な子ども実験群』59名、『社会性の高い子ども実験群』42名、『問題行動傾向がある子ども実験群』35名、『引っ込み思案な子ども統制群』52名、『社会性の高い子ども統制群』49名、『問題行動傾向がある子ども統制群』30名となった。

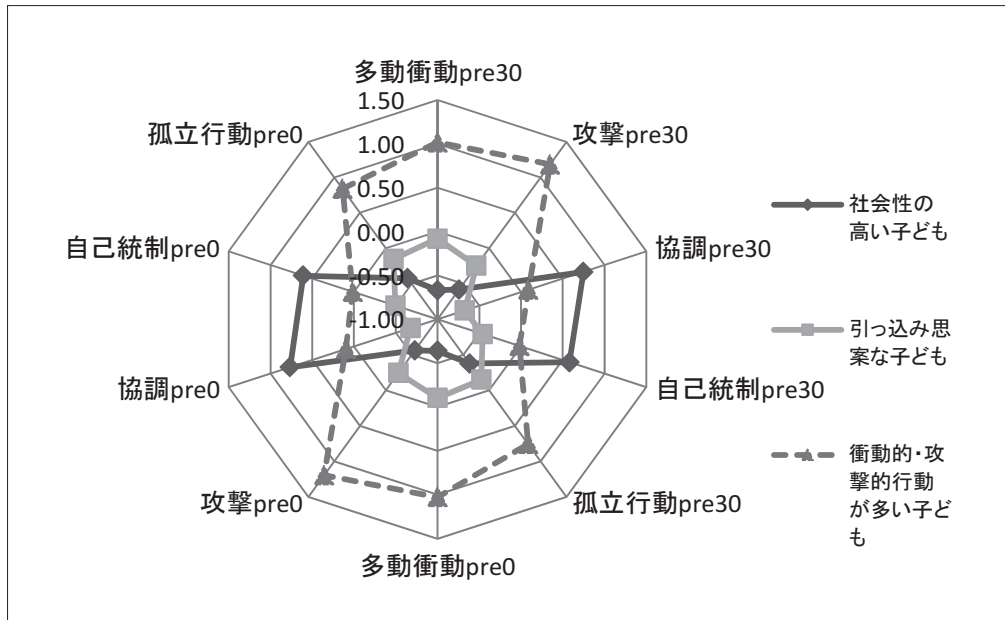


Fig. 1 介入前におけるCSB-RSによる子どもたちのクラスタ分類

介入効果の検討

本研究において介入開始1ヶ月前、介入開始直前、介入終了直後、介入終了1ヶ月後の4時点において測定した。母親の養育スキル、ストレス反応、子どもの行動傾向についての3種類の尺度の得点について、以下のような統計的検定を行った。まず、各尺度、各因子の得点について測定時期の要因についての1要因分散分析を行い、主効果が有意であれば、Bonferroniの法による多重比較を行った。この平均値の差の検定において、①介入開始1か月前から介入開始直前の得点の変化が有意でないこと、②介入開始直前から介入終了直後、または介入終了1ヶ月後にかけての得点の差が改善方向で有意であること、さらに、③算出した効果サイズ(Cohenのd)が、改善方向において十分な大きさ($d > |.02|$)であることを、介入効果を認める要件とした(福島ら2013)。

社会性の高い子ども群に対する介入効果

『社会性の高い子ども実験群』及び『統制群』におけるWL期と、介入開始時(pre0)から介入終了時(post)及び介入終了1ヶ月後の間の介入効果、介入開始時(pre0)から介入終了時(post)及び介入終了1ヶ月後(follow)の効果サイズによって示される結果をTable 1に示す。

Table 1 社会性の高い子ども群に対する介入効果

	下位因子	介入群					統制群				
		WL 期	pre0-pos t	pre0-follo w	d(pre0-p ost)	d(pre0-f ollow)	WL 期	pre0-pos t	pre0-foll ow	d(pre0- post)	d(pre0-f ollow)
養育スキル	好ましい働きかけ	n.s.	n.s.	n.s.	0.16	0.18	n.s.	n.s.	n.s.	-0.10	-0.16
	話し合い	n.s.	n.s.	n.s.	0.02	0.20	n.s.	n.s.	n.s.	0.09	0.03
	関心	n.s.	n.s.	n.s.	0.02	0.19	n.s.	n.s.	n.s.	0.08	0.06
	罰	p<.05	n.s.	n.s.	-0.07	-0.29	n.s.	n.s.	n.s.	-0.04	-0.05
	一貫性のないしつけ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.24	-0.33	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	-0.08
C S B R S	衝動・多動性	n.s.	n.s.	n.s.	0.12	-0.08	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	0.07
	攻撃的行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	-0.05	n.s.	n.s.	n.s.	0.07	-0.03
	協調的な適応行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.19	-0.03	n.s.	n.s.	n.s.	-0.40	-0.32
	自己統制行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.37	-0.19	n.s.	n.s.	n.s.	-0.20	-0.10
	孤立行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.03	-0.09	n.s.	n.s.	n.s.	0.05	0.12
ストレス	抑うつ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	-0.17	n.s.	n.s.	n.s.	-0.13	-0.04
	不安	n.s.	n.s.	n.s.	-0.22	-0.20	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	0.03
	不機嫌	n.s.	n.s.	n.s.	-0.16	-0.19	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	-0.16
	思考力低下	n.s.	n.s.	n.s.	0.11	0.05	n.s.	n.s.	n.s.	-0.01	0.15
	絶望	n.s.	n.s.	n.s.	0.00	-0.17	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	-0.06
	不信	n.s.	n.s.	n.s.	-0.13	-0.17	n.s.	n.s.	n.s.	0.09	0.13
	自信喪失	n.s.	n.s.	n.s.	-0.07	-0.12	n.s.	n.s.	n.s.	-0.04	0.00
	怒り	n.s.	n.s.	n.s.	-0.04	-0.09	n.s.	n.s.	n.s.	-0.10	-0.05
	無気力	n.s.	n.s.	n.s.	-0.20	-0.11	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	0.05
	引きこもり	n.s.	n.s.	n.s.	-0.04	0.04	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	0.06
	非現実的願望	n.s.	n.s.	n.s.	-0.10	-0.10	n.s.	p<.05	n.s.	-0.20	-0.07
	焦燥	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.12	n.s.	n.s.	n.s.	0.02	0.06
	心配	n.s.	n.s.	n.s.	-0.15	-0.24	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	0.04

効果サイズ凡例 **大** **中** **小**

養育スキルへの効果 『社会性の高い子ども実験群』において、平均値の差の検定では、「罰」スキルの使用でWL期に有意な改善が認められた。WL期の1ヶ月が夏休みであり介入開始時に夏休みが終了して「罰」スキルを使用しなくてもよい状態になり、それが結果に影響したものであると思われる。他の養育スキルにおいては有意な改善は認められなかった。

子どもの行動傾向(母親の評定によるCSB-RS)への効果 介入を行った3群のうち、『社会性の高い子ども実験群』では、平均値の差の検定においても効果サイズにおいても有意な改善は見られなかった。あらかじめ、行動傾向が良好な子どもたちであるため、天井効果が生じてしまったと解釈される。

母親のストレス症状への効果 『社会性の高い子ども実験群』では、平均値の差の検定において有意な改善は認められなかった。統制群において、介入開始時から介入終了時にかけて有意な改善が見られたが、長期的な改善とは言えない。

引込み思案な子ども群に対する介入効果

『引込み思案な子ども実験群』及び『統制群』におけるWL期と、介入開始時 (pre0) から介入終了時(post)及び介入終了1ヶ月後の間の介入効果, 介入開始時 (pre0) から介入終了時 (post)及び介入終了1ヶ月後(follow)の効果サイズによって示される結果をTable 2に示す。

Table 2 引込み思案な子ども群に対する介入効果

	下位因子	介入群					統制群				
		WL期	pre0-post	pre0-follow	d(pre0-post)	d(pre0-follow)	WL期	pre0-post	pre0-follow	d(pre0-post)	d(pre0-follow)
養育スキル	好ましい働きかけ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.03	0.00	n.s.	n.s.	n.s.	0.04	0.09
	話し合い	n.s.	n.s.	n.s.	0.04	0.13	n.s.	n.s.	n.s.	0.08	0.14
	関心	n.s.	n.s.	n.s.	0.05	0.19	n.s.	n.s.	n.s.	0.22	0.24
	罰	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	-0.15	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	-0.21
	一貫性のないしつけ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.24	-0.18	n.s.	n.s.	n.s.	0.02	0.02
C	衝動・多動性	n.s.	n.s.	n.s.	-0.07	-0.14	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.13
	攻撃的行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.18	-0.13	n.s.	n.s.	n.s.	-0.17	-0.12
S	協調的な適応行動	n.s.	n.s.	p<.05	0.32	0.44	n.s.	n.s.	n.s.	0.05	0.11
	自己統制行動	n.s.	n.s.	n.s.	0.40	0.31	n.s.	n.s.	p<.05	0.07	0.54
R	孤立行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.04	-0.10	n.s.	n.s.	n.s.	-0.10	-0.21
	抑うつ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.26	-0.17	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	-0.29
ストレス	不安	n.s.	n.s.	n.s.	-0.23	-0.18	n.s.	n.s.	n.s.	0.04	-0.13
	不機嫌	n.s.	n.s.	n.s.	-0.12	-0.10	n.s.	n.s.	n.s.	0.04	-0.04
	思考力低下	n.s.	n.s.	n.s.	-0.15	-0.21	n.s.	n.s.	n.s.	-0.03	-0.14
	絶望	n.s.	n.s.	n.s.	-0.16	-0.10	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	-0.11
	不信	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.28	n.s.	n.s.	n.s.	0.19	0.16
	自信喪失	n.s.	n.s.	p<.05	-0.29	-0.29	n.s.	n.s.	n.s.	-0.19	-0.17
	怒り	n.s.	n.s.	n.s.	-0.20	-0.17	n.s.	n.s.	n.s.	-0.09	-0.22
	無気力	n.s.	n.s.	n.s.	-0.13	-0.17	n.s.	n.s.	n.s.	-0.14	-0.21
	引きこもり	n.s.	n.s.	n.s.	-0.24	-0.16	n.s.	n.s.	n.s.	-0.26	-0.27
	非現実的願望	n.s.	n.s.	n.s.	-0.19	-0.16	n.s.	n.s.	n.s.	-0.21	-0.22
	焦燥	n.s.	n.s.	n.s.	-0.23	-0.23	n.s.	n.s.	n.s.	-0.07	-0.24
	心配	n.s.	n.s.	n.s.	-0.26	-0.25	n.s.	n.s.	n.s.	-0.18	-0.03

効果サイズ凡例

大 中 小

養育スキルへの効果 『引込み思案の子ども実験群』及び『統制群』では、平均の差の検定で各養育スキルの使用において有意な改善は見られなかった。

子どもの行動傾向(母親の評定によるCSB-RS)への効果 『引込み思案の子ども実験群』では、「協調的な適応行動」において、平均値の差の検定で介入開始時からフォローアップ時点にかけての長期間において有意な改善が見られた(p<.05)。効果サイズでは、介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の改善が見られた。

『引込み思案の子ども統制群』では、介入が行われていないにもかかわらず「自己統制行動」において、平均値の差の検定では、介入開始時からフォローアップ時点(p<.05)に行動傾向の改善が示されている。効果サイズでは、介入開始時からフォローアップ時点にかけて中程度の改善が見られた。これは、統制群も同じ園に在園している子どもであるために、幼稚園で

の指導や介入内容が伝達された可能性があると考えられる。

母親のストレス症状への効果 『引っ込み思案の子ども実験群』では、「自信喪失」の因子において、平均値の差の検定では介入開始からフォローアップ時点の長期間にかけて ($p<.05$) 有意な改善が見られた。効果サイズでは、介入開始時から介入終了直後、介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の効果が見られた。

問題行動傾向がある子ども群に対する介入効果

『問題行動傾向がある子ども実験群』及び『統制群』におけるWL期と、介入開始時 (pre0) から介入終了時 (post) 及び介入終了1ヶ月後 (follow) の間の介入効果、介入開始時 (pre0) から介入終了時 (post) 及び介入終了1ヶ月後 (follow) の効果サイズによって示される結果をTable 3に示す。

Table 3 問題行動傾向がある子ども群に対する介入効果

	下位因子	介入群					統制群				
		WL期	pre0-post	pre0-follow	d(pre0-post)	d(pre0-follow)	WL期	pre0-post	pre0-follow	d(pre0-post)	d(pre0-follow)
養育スキル	好ましい働きかけ	n.s.	n.s.	n.s.	0.00	-0.06	n.s.	n.s.	n.s.	0.02	0.06
	話し合い	n.s.	n.s.	n.s.	0.01	0.17	n.s.	n.s.	n.s.	0.02	0.13
	関心	n.s.	n.s.	n.s.	-0.01	0.02	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	0.22
	罰	n.s.	n.s.	n.s.	-0.31	-0.17	p<.05	n.s.	n.s.	0.05	0.10
	一貫性のないしつけ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.05	-0.11	n.s.	n.s.	n.s.	0.08	0.00
C S B R S	衝動・多動性	n.s.	n.s.	p<.05	-0.19	-0.36	n.s.	n.s.	n.s.	-0.30	-0.30
	攻撃的行動	n.s.	n.s.	p<.05	-0.32	-0.66	n.s.	p<.05	p<.05	-0.60	-0.50
	協調的な適応行動	n.s.	n.s.	n.s.	0.19	0.09	n.s.	n.s.	n.s.	0.09	-0.01
	自己統制行動	n.s.	n.s.	n.s.	0.10	0.09	n.s.	n.s.	n.s.	-0.03	0.14
S	孤立行動	n.s.	n.s.	n.s.	-0.25	-0.54	n.s.	n.s.	p<.05	-0.22	-0.33
ストレス	抑うつ	n.s.	n.s.	n.s.	-0.26	-0.13	n.s.	n.s.	n.s.	0.00	0.00
	不安	n.s.	n.s.	n.s.	-0.13	-0.09	n.s.	n.s.	n.s.	-0.02	-0.01
	不機嫌	n.s.	n.s.	n.s.	-0.33	-0.29	n.s.	n.s.	n.s.	-0.04	-0.15
	思考力低下	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	-0.07	n.s.	n.s.	n.s.	0.12	0.00
	絶望	n.s.	n.s.	n.s.	-0.22	-0.15	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	0.00
	不信	n.s.	n.s.	n.s.	-0.34	-0.23	n.s.	n.s.	n.s.	0.23	0.09
	自信喪失	n.s.	n.s.	n.s.	-0.24	-0.13	n.s.	n.s.	n.s.	0.09	-0.01
	怒り	n.s.	n.s.	n.s.	-0.29	-0.2	n.s.	n.s.	n.s.	0.08	-0.03
	無気力	n.s.	n.s.	n.s.	-0.08	-0.22	n.s.	n.s.	n.s.	0.07	0.01
	引きこもり	n.s.	n.s.	n.s.	-0.16	-0.19	n.s.	n.s.	n.s.	0.08	0.05
	非現実的願望	n.s.	n.s.	n.s.	-0.11	-0.13	n.s.	n.s.	n.s.	0.10	-0.04
	焦燥	n.s.	n.s.	n.s.	-0.06	-0.26	n.s.	n.s.	n.s.	-0.01	-0.05
	心配	n.s.	n.s.	n.s.	-0.11	0.02	n.s.	n.s.	n.s.	0.07	0.02

効果サイズ凡例 **大** **中** **小**

養育スキルへの影響 『問題行動傾向がある子ども実験群』では、平均の差の検定で各養育スキルに使用において有意な改善は見られなかった。しかし、統制群の「罰」スキルの使用において平均値の差の検定で、WL期に有意な改善が見られた。これも、夏休み効果ではないかと考えられる。

子どもの行動傾向(母親の評定によるCSB-RSへの効果) 『問題行動傾向がある子ども実験群』は、「衝動的・多動的行動」において、平均値の差の検定では、介入開始時からフォローアップ時点の長期間にかけて有意に改善した($p<.05$)。効果サイズでは、介入開始時からフォローアップ時点にかけて小程度の改善が見られた。また、「攻撃的行動」において、平均値の差の検定では、介入開始時からフォローアップ時点の長期間にかけて有意に改善した ($p<.05$)。効果サイズでは、介入開始時から介入終了時にかけて小程度の改善、介入開始時からフォローアップ時点にかけては中程度の改善が見られた。

一方、『問題行動傾向がある子ども統制群』の「攻撃的行動」において、平均値の差の検定で、介入開始時から介入終了時 ($p<.05$)、介入開始時からフォローアップ時点 ($p<.05$) で有意に改善した。効果サイズでは、介入開始時から介入終了時で中程度、介入開始時からフォローアップ時点で小程度の改善が見られた。「孤立行動」においても、平均値の差の検定で、介入開始時からフォローアップ時点で有意な改善が見られた ($p<.05$)。効果サイズでは、介入開始時からフォローアップ時点で小程度の改善が見られた。このことについても、幼稚園内での指導や、介入内容が母親間で伝達された可能性があると考えられる。

母親のストレス症状への効果 『問題行動傾向がある子ども実験群 及び 統制群』では、平均値の差の検定において、全因子で有意な改善は見られなかった。

【考察】

子どもの行動傾向への効果と立元・福島(2009)の結果との比較

立元・福島(2009)では、介入を行った実験群を介入開始前の親評定の子どもの行動傾向(CSB-RS; 立元ら, 2011)によって、『引っ込み思案の子ども群』、『問題行動傾向のある子ども群』、『社会性の高い子ども群』の3群に分類した。『引っ込み思案の子ども群』は、5領域の行動傾向のうち、「衝動的・多動的行動」「攻撃的行動」「協調的行動」「自己統制行動」の4領域で有意な改善を示し、効果サイズの検討では、全ての領域にわたって大～小の介入効果が認められた。実験群の「衝動的・多動的行動」におけるWL期における変動等、慎重に考えなければならぬ部分もあるが、概して『引っ込み思案の子ども群』に対しては、良好な介入効果が示されたと考えることができる。『問題行動傾向の子ども群』は、得点の平均値の推移から見た効果の検討では、「孤立行動」のみにおいて有意な改善が示された。また、効果サイズの検討においては、全ての領域に渡って中～小の改善が示された。『社会性の高い子ども群』においては、得点の平均値の推移においても、効果サイズによる検討においても、改善効果は示されなかった。あらかじめ、行動傾向が良好な子どもたちであるため、天井効果が生じてしまったと解釈している。福島ら(2013)と同じように3つの基準に照らし合わせて効果の検討を行うと、立元・福島(2009)は『引っ込み思案の子ども群』の「衝動的・多動的行動」「攻撃的行動」「協調的な適応行動」「自己統制行動」に効果が認められた。また、『問題行動傾向の子ども群』の「孤立行動」に効果が認められた。

立元・福島(2009)ではかなりの効果が出ているが、福島ら(2013)では、母親の養育スキルへの介入効果は大きくはなく、子どもの行動傾向への介入効果も大きく出てはいなかった。しかし、本研究では、『問題行動傾向がある子ども実験群』について、「衝動的・多動的行動」については、効果サイズでは小程度であるが、平均値の変動は有意であった。また、「攻撃的行動」

については、中程度の効果サイズで有意に攻撃行動の得点が減少したことが認められた。立元・福島(2009)では、この変動は、いずれも小程度であった。特に「攻撃的行動」に変動が見られたのは、この時期は運動会の練習があり保育者の指導が集中しやすかったうえに保護者のかかわり方が変化しやすい状況にあったのではないかと考えられ、改善してほしい部分に効果が見られたということが捉えられた。

『引っ込み思案の子どもの実験群』では、「協調的な適応行動」により効果が確認できた。立元・福島(2009)では、『引っ込み思案の子ども群』の全ての因子において効果サイズが大きく出たり、「孤立行動」以外の平均値の変動も有意であった。これは、はなまる行動で子どもに自信を付けさせることについての介入が充分でなかったのではないかと考えられる。また、宿題の確認が不十分であり、実践する意欲を高めることができなかったことが影響したのではないかと考えられる。

今後、介入効果を上げていくためには、「やってみたこと」(宿題)をほとんどの参加者に書かせる工夫を加えることで参加者に学んだことをより強く意識し、実践を高めることにつながるのではないかと考えられる。

さらに、WL期からフォローアップまでの時期を長期休みの影響を受けない5月中旬に介入を開始することで、また異なった効果が測れるのではないかと考えられる。

文 献

- 福島裕子・立元真・古川望子・齊田聖美・椎葉恵美子(2013)幼稚園教諭自身によるペアレント・トレーニングの実践—どのような母親に効果が見られたのか— 宮崎大学教育文化学部紀要, 28, 教育科学, 61-72.
- 新名理恵・坂田成輝・矢富直美・本間昭(1990) 心理的ストレス反応尺度の開発 心身医学, 30, 30-38.
- 立元真(2005) 幼児の親に対する予防的な養育スキル・愛着関係改善トレーニング 平成15~16年度科学研究費補助金(基盤C)研究成果報告書
- 立元真(2009) 幼児を持つ親への予防的親トレーニングの試み(4) —介入前の養育スキル特性による検討— 第73回日本心理学会発表論文集, 1106.
- 立元真・福島裕子(2009) 幼児を持つ親への予防的親トレーニングの試み(5) —ペアトレはどんな子どものように効いたのか— 第35回日本行動療法学会 プログラム&抄録・発表論文集, 310-311.
- 立元真・古川望子・福島裕子・永友絵理(2011)保護者評定による子どもの社会的行動評価尺度の作成 宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要, 19, 39-47.